【原著】

新生児の母性看護学演習項目を全身清拭に変更したことによる演習の学びと実習への効果

菊地美帆、髙島葉子、髙塚麻由

新潟県立看護大学　臨床看護学領域　助産学

（受付：平成24年4月27日）
（受理：平成24年5月9日）

要　旨

N看護大学における、平成22年度の新生児に対する母性看護学演習項目を「沐浴」から「全身清拭」に変更したことによる演習の学びと実習への効果を明らかにするために、「新生児の全身清拭」についての演習後レポートの自由記載を分析した。また、実習技術経験録の新生児に関する項目の経験状況を把握し、平成21年度との比較を行った。学生は演習を通し【「モデル人形の限界」の認識】をしつつも、【「慈しみのあるケアを実践してみたい」という希望】を抱いており、実習に向けた【技術の未熟さに伴う反復練習の必要性の認識】をしていた。実習における新生児の清拭の実施は43名(48.3%)であり、平成21年度と比較して約10%増加した。また清拭の実施の増加に伴い、環境の確認、感染・事故防止対策、体重の測定、臍帯の処置の実施が約5～31%著増した。演習した技術を実習に活かせることは、学生のモチベートを挙げることにも繋がると示唆された。

キーワード：母性看護学演習、母性看護学実習、新生児、全身清拭

諸　言

厚生労働省は、看護に必要な知識や技術を習得することに加えて、身につけた知識に基づいて思考する力、及びその思考を基に状況に応じて適切に行動する力をもつ人材育成のために看護基礎教育の充実を目指している[1)]。2004年、大学卒業時の到達目標を示した報告書[2)]が示され、技術力の統一と向上が望まれることとなった。看護学教育における臨地実習の位置づけは、学生が学内で学習した知識・技術・態度の統合を図り、看護の実践能力を習得する必要不可欠な学習である[3)]。さらに、対人コミュニケーションといった関係調整能力育成の場でもある。しかし、臨地実習の時間には限りがあり、医療における安全の確保、患者の権利の擁護などへの配慮から、臨地実習において学生の経験できる技術が制限されることが多々ある。特に新生児の沐浴に関しては、エビデンスの観点から沐浴を中止した施設もあり、加えて安全性の確保から学生の実施を許可しない施設も増えている。

N看護大学の平成21年度母性看護学演習（以下演習）では、従来通り新生児の沐浴技術を教授した。しかし、母性看護学実習（以下実習）での沐浴・清拭実施は38.4%であり、実施内容も臀部浴介助、衣類の着脱などで一連の沐浴は実施できていなかった[4)]。実習において看護技術を実施する機会がなければ学生の達成感は低くなる[5)]ように、難易度が高い沐浴を演習し評価していながら、実習で実施できないことは、学生にとって不利益となる。そこで、平成22年度は実習施設で実施している清拭に焦点を合わせ、新生児の清潔に対する演習項目を「沐浴」から「全身清拭」に変更することによって、実習において新生児の清拭を実施する機会が増えることを期待した。

本研究は、平成22年度の新生児に対する演

習項目を「沐浴」から「全身清拭」に変更したことによる演習の学びと実習への効果を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 研究対象

研究対象は、N看護大学の平成22年度3年次生であり、3年前期の演習を受講した学生90名の「新生児の全身清拭」についての演習後レポートの「感想と今後の課題」に記載された記録と、3年後期の母性看護学実習を履修した学生89名の実習技術経験録（以下経験録）の新生児に関する項目を分析した。

2. 研究期間

平成22年5月から平成23年1月

3. 分析方法

1)「新生児の全身清拭」についての演習後レポートの「感想と今後の課題」に自由記載された記載内容を繰り返し読み、意味ある文脈を取り出した。それらを内容の類似するものにまとめてサブカテゴリー化し、さらにカテゴリーへと抽出した。分析内容は演習担当の教員間で検討した。

2) 平成22年度3年次生89名の計48項目からなる経験録より、新生児に関する14項目の経験状況を把握し平成21年度との比較を行った。経験録の記載内容をデータ化し、Excel 2007にて入力し記述統計処理を行った。

4. 倫理的配慮

研究に用いる自由記載された記録内容および経験録は個人名が特定されないように集計し、プライバシーが保護されるように配慮した。また学生には、研究の概要や調査・研究への協力依頼および倫理的配慮についての文書を掲示し、研究不参加の申し出がないことをもって、同意を得たと判断した。

結　果

1. 演習後レポートの「感想と今後の課題」の分析結果

分析の結果6つのカテゴリーと22のサブカテゴリーが抽出された(表1)。内容については、以下に記述する。なお、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは〈〉を用いる。自由記述されたデータは「」、補足箇所と中略は（）で表記する。

1)【「講義と技術の統合」の必要性】

学生は座学や事前学習を通して〈児の身体的特徴を踏まえた方法で実施する必要性を理解〉〈児の清拭には安全性の確保が大切〉〈頸の保持、清拭の強さ、流れ、なだめながらを考えた技術の実施〉〈原始反射、不定頸、易股関節脱臼、脆弱さに配慮が必要〉〈清潔以外の清拭技術の目的を理解〉をして演習にのぞんでいた。そして、実習へとつなげていくためには、演習において【「講義と技術の統合」の必要性】があることに気づいていた。

「反射(モロー反射、把握反射など)があるため、清拭がスムーズに行えるように拭く順に留意（手の指は小指から）するなど特徴に合わせた方法で行う必要がある。」

「新生児が動き、傷つけてしまわないように児をきちんと固定したうえで行い、児の安全を確保する必要があると思った。」

「定頸もしてないし、脱臼の危険も高いので、注意が必要であると思いました。」

2)【「技術に集中し、その他の配慮が欠けてしまう」ことの気づき】

学生は演習において〈新生児の清拭の多様な目的を理解しているが他に配慮できない〉〈拭く技術に気をとられ、観察や児の気持ちに配慮できなくなる〉〈自分のことに精一杯になり配慮できなくなる〉という体験を通し【「技術に集中し、その他の配慮が欠けてしまう」ことの気づき】に至っていた。座学や事前学習課題を学習することによって、新生児の全身清拭の目的を清潔保持以外にもあることに気づき、さらに実施において留意しなければならないことも理解しているが、演習してみると技術の全手順に配慮した実施ができないことを自覚し、反省していた。

「一つのことに注目しているとほかの留意点

を落としてしまいやすい。」

「自分のことで精一杯にならず、児の気持ちを考えたケアをしていきたいと思う。」

3)【「反応を捉えにくく、脆弱な新生児に対する清拭技術の難しさ」の気づき】

学生は新生児が〈不定頸であり体が小さく、一つひとつの清拭技術が難しい〉〈反応が読み取れず技術が困難〉と、新生児の身体的特徴による清拭技術の困難さに十分気づいていた。モデル人形を使用した清拭技術演習であったとしても、目前にいるモデル人形を超えて実際の児をイメージしながら演習した。

「首がすわっていないと動かすことが怖く感じ、慎重にやったら時間がかかってしまったので、素早く安全に行うのが難しい。」

「先生の手本を見ていると難しそうには見えなかったのですが、いざ自分がやってみると手順を間違ったりうまく拭くことができなかったり、余裕がなくなって新生児への配慮を忘れていたりと散々でした。」

4)【「モデル人形の限界」の認識】

学生は演習を通して〈モデル人形と実際の新生児とは相当に違うイメージ〉〈実際の児の動きや泣くことの反応に合わせた技術の困難さの想像〉〈モデル人形では清拭の強さのイメージ化が困難〉を体験していた。新生児と直接接する機会のない学生であっても、生活の中やメディア教材などから本物の新生児を精一杯イメージ化しながら、モデル人形と対比して演習していた。しかし、本物の児に対して行う清拭技術からしかうかがいしれない反応があり、【「モデル人形の限界」の認識】をしていた。

「清拭時の力の入れ具合が分からず、汚れをふき取れるが新生児の肌を傷つけないよう

表1　新生児の全身清拭演習後レポート「感想と今後の課題」 分析結果

サブカテゴリー	カテゴリー
児の身体的特徴を踏まえた方法で実施する必要性を理解	「講義と技術の統合」の必要性
児の清拭には安全性の確保が大切	
頸の保持、清拭の強さ、流れ、なだめながらを考えた技術の実施	
原始反射、不定頸、易股関節脱臼、脆弱さに配慮が必要	
清潔以外の清拭技術の目的を理解	
新生児の清拭の多様な目的を理解しているが他に配慮できない	「技術に集中し、その他の配慮が欠けてしまう」ことの気づき
拭く技術に気をとられ、観察や児の気持ちに配慮できなくなる	
自分のことに精一杯になり配慮できなくなる	
不定頸であり体が小さく、一つひとつの清拭技術が難しい	「反応を捉えにくく、脆弱な新生児に対する清拭技術の難しさ」の気づき
反応が読み取れず技術が困難	
モデル人形と実際の新生児とは相当に違うイメージ	「モデル人形の限界」の認識
実際の児の動きや泣くことの反応に合わせた技術の困難さの想像	
モデル人形では清拭の強さのイメージ化が困難	
お母さんの大切な子どもだから、私も大切にしたい	「慈しみのあるケアを実践してみたい」という希望
新生児に気持ちよくなってほしい	
自分から訴えない児だからこそ、自らを児の身に置き換えケアしたい	
体温低下に配慮した技術の必要性	技術の未熟さに伴う反復練習の必要性の認識
安全な支え方が必要	
児を泣かせないようにしなければいけない	
一人の人間として言葉かけをしながらのケアが必要	
技術力のなさが抱き方、準備の不手際、手順通りにできない形であらわれる	
練習、事前学習をしなければ児に負担をかけるという思い	

な力加減をつかむ必要があると感じた。」

5)【「慈しみのあるケアを実践してみたい」という希望】

学生は演習を通して【「モデル人形の限界」の認識】をしながらも、〈お母さんの大切な子どもだから、私も大切にしたい〉〈新生児に気持ちよくなってほしい〉〈自分から訴えない児だからこそ、自らを児の身に置き換えケアしたい〉という【「慈しみのあるケアを実践してみたい」という希望】を抱いていた。

「新生児に気持ちよくなってもらうことを思い、頑張りたいと思う。」

「お母さんの大切な子どもさんなのだから、私も大切に扱わなければならないと感じた。」

6)【技術の未熟さに伴う反復練習の必要性の認識】

学生は〈体温低下に配慮した技術の必要性〉〈安全な支え方が必要〉〈児を泣かせないようにしなければいけない〉〈一人の人間として言葉かけをしながらのケアが必要〉であると認識し、課題としながら演習したが〈技術力のなさが抱き方、準備の不手際、手順通りにできない形であらわれる〉という体験をし〈練習、事前学習をしなければ児に負担をかけるという思い〉に至っていた。頭でいくら理解していても技術というものは、繰り返し練習しなければ身につかないという体験は、学生に【技術の未熟さに伴う反復練習の必要性の認識】を促し、今後の課題となっていた。

「赤ちゃんの熱喪失を防ぐために、もっと手際よく清拭が行えるようにしたい。」

「道具の準備、セッティングをしっかりやるべきだった。」

「短時間で行いたかったが、できなかったので実習にいくまでには短時間で確実なケアができるように学習したい。」

2. 母性看護学実習の概要

実習（3単位）は、3年後期の9月から翌年1月までの5ヶ月間を6クールに編成し、1クール14~15名が2施設に分かれ実習した。実習施設で行っている新生児の保清は、A施設では沐浴、B施設では清拭・臀部浴と沐浴であった。学生の配置人数はA施設35名、B施設は54名であり、半数以上の学生がB施設で実習した。臨地実習は病棟実習9日、外来実習は1日であり、病棟実習は、分娩期・新生児期・産褥期実習で構成されている。新生児期実習は2日間であり、学生はそれぞれ1名の新生児を1～2日受け持った。2施設とも母児同室制であるため、主な実習は、新生児を新生児室にお預かりしている午前中に行った。

3. 経験録の集計結果　平成21年度と平成22年度の実施比較（新生児）

平成21年度の経験録の技術項目は、妊婦9項目、産婦13項目、出生直後の新生児2項目、新生児13項目、褥婦10項目の計47項目であったが、平成22年度の経験録は、新生児の保清についてより具体的に把握するために、沐浴と清拭に分け、新生児の技術項目を14項目とし計48項目とした。

表2に平成21年度、22年度の新生児の技術項目の実施状況について示す。新生児の技術項目のうち平成22年度90%以上の学生が実施できた項目は、新生児健康診査（バイタルサイン、成熟徴候、原始反射など）82名（92.1%）、黄疸指数の測定84名（94.4%）、おむつ交換83名（93.3%）、抱き方・寝かせ方84名（94.4%）であり平成21年度と差はなかった。平成21年度の経験録は、沐浴と清拭を同一項目であるため、それぞれの実施数は把握できない。平成21年度は、沐浴・清拭あわせ実施数が33名（38.4%）であったが、平成22年度の清拭の実施は43名（48.3%）と9.9%増加した。また他に、環境の確認（室温・湿度など）は67名（75.3%）で5.5%、感染・事故防止対策は76名（85.4%）で9.8%、体重の測定は74名（83.1%）で15.7%、臍帯の処置は48名（53.9%）で30.6%と著しく増加した。

考　察

1. 新生児の全身清拭の演習効果

N看護大学の平成21年度演習では、従来通

り新生児の沐浴技術を教授してきた。しかし、実習での沐浴・清拭実施は、33 名（38.4%）であり実施内容も臀部浴介助、衣類の着脱などで一連の沐浴は実施できていなかった。これを反映して、実習終了後の学生アンケートには「演習で沐浴を実施したが、実習では行うことができなかったことは少し残念。」とあり、学生が達成感を味わうことができなかった現状があった。

母性看護学における新生児の清潔ケア技術において、沐浴は、新生児の特徴や新生児をケアするうえで必要なさまざまな技術で成り立っており非常に有効であるが、頭部の固定一つとっても習得困難なケア技術である[6]。実習における学生の期待感や満足感の低下から、沐浴技術演習をとりやめ、実習可能な全身清拭に切り替えることは苦渋の決断であった。しかし、演習後レポートの「感想と今後の課題」の分析結果から、演習項目を全身清拭に切り替えても十分な教育効果が見込めると考えることができた。学生は、演習を通して【「講義と技術の統合」の必要性】があることを理解していた。新生児の全身清拭を体験することで【「反応を捉えにくく、脆弱な新生児に対する清拭技術の難しさ」の気づき】や【「技術に集中し、その他の配慮が欠けてしまう」ことの気づき】があり、実施にあたり留意点や配慮点を自覚し反省もしていた。【「モデル人形の限界」の認識】しながらも、新生児の身体的特徴や愛着を持ってかかわることの大切さ、【「慈しみのあるケアを実践してみたい」という希望】を持ち、実習に向けて【技術の未熟さに伴う反復練習の必要性の認識】を促し、技術を深めていかなければならないという動機づけは十分になされていたと考える。安東ら[7]は「演習により母性を意識して身近に感じることにより、さらなる学習効果が期待できる」と述べており、新生児の全身清拭は、母性を意識する体験であったといえ、学生は練習を積み重ね 3 年後期の実習に臨むことができたと考える。

2. 平成 21 年度と平成 22 年度の経験録の実施比較

N 看護大学の経験録は、実施および見学別の記載であり学生の自己チェックである。経験録の項目は母性看護学に特徴付けられる項目であり、また難易度の高い項目でもあるため、教員および看護師の指導・監視のもと実施してきた。

平成 21 年度に清拭の実施が少なかった理由は、新生児の全身清拭の演習をしていないこと

表 2　平成 21 年度と平成 22 年度　経験録の実施比較　（新生児）

技術項目	平成 21 年度 (n = 86)		平成 22 年度 (n = 89)	
新　生　児	実施		実施	
環境の確認（室温・湿度など）	60	(69.8)	67	(75.3) ↑
感染・事故防止対策	65	(75.6)	76	(85.4) ↑
新生児健康診査（バイタルサイン、成熟徴候、原始反射など）	83	(96.5)	82	(92.1)
黄疸指数の測定	85	(98.8)	84	(94.4)
おむつ交換	80	(93.0)	83	(93.3)
抱き方、寝かせ方	81	(94.2)	84	(94.4)
体重の測定	58	(67.4)	74	(83.1) ↑
沐浴	33	(38.4)	1	(1.1)
清拭			43	(48.3) ↑
臍帯の処置	20	(23.3)	48	(53.9) ↑
哺乳と排気	29	(33.7)	20	(22.5)
身体の諸計測	9	(10.5)	53	(59.6) ↑
ガスリー検査・Bil 検査				
医師の診察				

で、臨床指導者の行う新生児の清拭を見学したのち放課後学内で練習をしてから、翌日の実習で清拭を実施していたことや、実施はせずに見学だけになっていたことが考えられる。また、新生児室の実習は2日間であり、口頭で同意を頂いた褥婦の新生児を受け持ち、観察・ケアをしていたため、褥婦への沐浴指導日や、退院当日は沐浴をして退院となるため、清拭を実施する機会がなかったことが考えられる。平成22年度に清拭の実施が増加した理由としては、新生児室の実習期間や、受け持ち制であることには変わりはないが、演習で全身清拭の技術を学び事前に練習をして実習に臨んでいたため、受け持ち1日目から清拭を実施できたこと、また清拭の見学だけでは終わらず、学生も自信を持って積極的に実施できたからと考える。神谷ら[8]の調査では、【母性看護特有の技術の成功体験】が学生の感じる達成感・満足感の要素の一つであることが明らかとなっている。実習後の学生アンケートの中に「新生児実習では、実際に児のバイタルサイン測定や清拭、抱っこ等ができ、実際に人形と人でおこなうときの違いなどが肌で感じることができ良かった。」という感想があり、演習した技術を実習に活かせることは、学生のモチベートを挙げることにも繋がると示唆された。

3. 清拭実施に伴う波及効果

平成22年度の清拭の実施は43名（48.3％）と9.9％増加した。清拭実施に伴い新生児の体重の測定や臍帯の処置の実施が必然的に増加すると考えられるが、臍帯の処置は30.6％も著増していた。

演習後レポートの「感想と今後の課題」の分析結果には、【技術の未熟さに伴う反復練習の必要性の認識】はもちろんのこと、*「新生児が動き、傷つけてしまわないように児をきちんと固定したうえで行い、児の安全を確保する必要があると思った。」「定頸もしてないし、脱臼の危険も高いので、注意が必要であると思いました。」*というように、〈児の清拭には安全性の確保が大切〉であることや、*「赤ちゃんの熱喪失を防ぐために、もっと手際よく清拭が行えるようにしたい。」「道具の準備、セッティングをしっかりやるべきだった。」*など〈体温低下に配慮した技術の必要性〉や〈技術力のなさが抱き方、準備の不手際、手順通りにできない形であらわれる〉ことに気づき、実施前の環境確認の必要性も理解できるようになっていた。こういった演習での学びが実習で実を結び、新生児の保清に関連する環境の確認（室温・湿度など）、感染・事故防止対策の実施が約5～10％増加したと考える。古畑ら[9]は、「演習は学生の母性看護学に対する興味を向上させる」と述べており、実習施設の状況に応じた演習内容に変更したことにより、学生は繰り返し技術を練習する中で清拭以外のことにも配慮することができるようになったと考える。

結　論

新生児に対する演習項目を「沐浴」から「全身清拭」に変更したことによる演習の学びと実習への効果は以下の通りである。

1. 学生は、新生児の全身清拭の演習において、モデル人形であっても新生児をイメージし、新生児の特徴を理解して演習していた。
2. 学生は【「モデル人形の限界」の認識】をしつつも、【「慈しみのあるケアを実践してみたい」という希望】を抱いており、実習に向けた【技術の未熟さに伴う反復練習の必要性の認識】をしていた。
3. 新生児の清拭の実施は43名（48.3％）であり、平成21年度と比較して9.9％増加した。
4. 清拭の実施の増加に伴い、環境の確認、感染・事故防止対策、体重の測定、臍帯の処置の実施が約5～31％著増した。
5. 新生児健康診査、黄疸指数の測定、おむつ交換、抱き方・寝かせ方の実施は90％以上であり、前年度同様の実施状況を維持することができた。
6. 演習した技術を実習に活かせることは、学生のモチベートを挙げることにも繋がると示唆された。

文　献

1) 厚生労働省：看護基礎教育にあり方に関する懇談会論点整理．2008 http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/dl/s0731-8b.pdf
2) 文部科学省：看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標（看護学教育の在り方に関する検討会報告）．2004 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm
3) 文部科学省高等教育局医学教育課：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて（看護学教育の在り方に関する検討会報告書）．2002 http://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf
4) 菊地美帆、髙島葉子、他：母性看護学実習における学生の技術経験状況と今後の課題－母性看護学実習技術経験録より－．医学と生物学　**155(3):** 142-148 2011
5) 曽田陽子、小松万喜子、他：基礎看護学実習において実施した看護技術に対する学生の達成感とその理由．愛知県立看護大学紀要 **12:** 67-74 2006
6) 今田葉子、斎藤真、他：新生児の沐浴技術における児頭固定の早期習得に関する研究．母性衛生 **50(1):** 165-173 2009
7) 安東良恵、久米美代子、他：母性看護学学内演習効果（第 2 報）－看護学生の背景と母性に対する興味－．ペリネイタルケア **19(12):** 78-82 2000
8) 神谷美樹、高杢裕子、他：母性看護学実習における看護学生が感じる満足感・達成感の分析．九州国立看護教育紀　**10(1):** 8-15 2007
9) 古畑真希子、久米美代子、他：母性看護学学内演習効果（第 3 報）－演習内容とその効果－．ペリネイタルケア **19(14):** 87-92 2000

連絡先：菊地美帆
新潟県立看護大学
新潟県上越市新南町 240（〒 943-0147）
Tel: 025-526-2811
E-mail: kikuchi@niigata-cn.ac.jp

The effect on students' learning and clinical practice outcome following a program change to newborn bed bath training in maternity nursing class

Miho KIKUCHI, Yoko TAKASHIMA, Mayu TAKATSUKA

Department of Midwifery, Faculty of Clinical Practical Nursing, Niigata College of Nursing

Summary

The maternity nursing class of the N College of Nursing changed the training program from newborn bath to whole-body bed bath in 2010. To examine the effect of this program change on learning and clinical practice outcomes, we analyzed free-text answers submitted by students who took newborn bed bath training, and reviewed training experience logs to compare them with the previous clinical experience in 2009 for neonatal care. The analysis revealed that students undergoing bed bath training entertained the "hope of practicing benevolent care" and "recognized the need for repetition drills for compensating for immature skill" in clinical practice, while also sensing the "limit of using a dummy." In clinical practice, 43 (48.3%) of the students experienced neonatal whole-bed baths, representing an increase of approximately 10% compared with the 2009 figure. Along with increased bed bath training, significantly more students experienced and conducted environment checks, prevention measures for infections and accidents, body weight measurements, and umbilical cord care, increasing by approximately 5-31%. The study results suggest that opportunities to apply acquired skills to clinical practice could enhance students' motivation.

(Med Biol **156:** 459-466 2012)

Key words: Maternity nursing training, clinical maternity nursing practice, neonates, whole-body bed bath

Correspondence address: Miho KIKUCHI
Niigata College of Nursing
240 Shinnancho, Joetsu City, Niigata 943-0147
Tel: 025-526-2811
E-mail: kikuchi@niigata-cn.ac.jp